

いしかわの遺跡

No.
49
2015.8.31

弥生時代中期

～古墳時代前期の建物群



調査区全景（東から）

小松市一針^{こまつし ひとつはり}C遺跡は、市の北部を流れる梯川^{かほしがわ}中流域右岸の一針町地内に位置します。平成26年度の調査では、右写真の弥生時代中期後半頃に掘削された環濠^{かんこう}と推定される区画溝や弥生時代中期～古墳時代前期の平地式建物が複数発見されたことに加え、方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}や土坑墓^{どこうぼ}などの墓域が集落域と混在して存在するなど、弥生時代集落の様相を具体的に把握することができました。その様相や変遷^{へんせん}から、一針C遺跡は弥生中期後半頃に環濠を伴いながら成立し、古墳時代前期頃まで集落が存続していたことが判明しました。



弥生時代の環濠と推定される溝

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

E-mail ● mail@ishikawa-maibun.or.jp ホームページ ● http://www.ishikawa-maibun.or.jp/



なか カワナミマエダ遺跡 (輪島市)



調査区全景 (東から)



鞍部から出土した縄文土器

中カワナミマエダ遺跡は、輪島市三井町中地内（標高約 93 m）に位置しており、発掘調査は能越自動車道輪島道路建設に伴い実施しました。

遺跡は丘陵の裾に並行する鞍部と仁行川に挟まれた微高地に立地しています。縄文時代中期中葉（上山田式）と古墳時代末～平安時代（7世紀後半～9世紀）の遺跡であり、主な遺構として掘立柱建物、溝、小穴などがあります。主な遺物は、縄文土器や石器、須恵器・土師器や沿岸部で作られた製塩土器も出土しています。遺跡の中心部には、4棟の掘立柱建物などがあります。第1・2号掘立柱建物の平面形は正方形に近く、柱と柱の間に浅い溝（縦板を据えた痕跡）がある珍しいものです。また、掘立柱建物の南側（鞍部付近）には、小砂利などを敷き詰めた溝があり、古代の道路跡と思われます。

今回の発掘調査により、輪島市三井町中周辺の歴史の一部を解明することに役立つものと思われます。



第2号掘立柱建物

H 26
発掘調査や た し ん い せ き こ ま つ し
矢田新遺跡 [小松市]

竪穴建物（飛鳥時代）遺物出土状況



竪穴建物（飛鳥時代）北西隅から出土した土器



堀（中世）



地下式坑（天井部除去後、中世）

矢田新遺跡は小松市の月津台地の西側、加賀市との市境近くにあり、遺跡から西に柴山潟、東に白山を望むことができます。平成26年度の発掘調査は南加賀道路建設に先立って行われ、飛鳥時代の竪穴建物、奈良・平安時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物、堀、地下式坑などが見つかりました。

飛鳥時代の建物は平面が5m×4mの住居で、北西隅から土師器の甕などが出土しました。この時期の建物は1棟のみで、集落の中心は調査区の北側になると考えられます。

奈良・平安時代の掘立柱建物は3間×5間で、比較的大型のものでした。

中世の遺構が最も多く、掘立柱建物、堀、地下式坑などが見つかりました。堀は幅1.6m、深さ0.9m、断面がV字状の比較的小規模なものでした。地下式坑は出入口の竪穴と地下の横穴で構成される特殊な遺構で、今回の調査で2基見つかりました。そのうちの大きな方は、竪穴の直径2.1m、深さ3m、横穴床面は長方形(2.1m×3.3m)に近く、床面から天井までは高いところで2m近くありました。天井はアーチ状になっており、横穴の覆土から15世紀代のすり鉢片が出土しました。



うるしまちいせき (小松市) 漆町遺跡



調査区遠景 (北西から)



廃滓坑群 (南東から)



鑄型と考えられる素焼き製品 (上:外面、下:内面)

漆町遺跡は、昭和 50 年代に広く発掘調査が行われており、加賀地方屈指の古代・中世の集落遺跡として知られています。平成 26 年度は、梯川改修築堤工事事業に伴い、遺跡北端部、梯川左岸沿いの小松市金屋町地内で発掘調査を行いました。

調査区の北西と北東方向を、近世以降に埋まった河川によって削られていたため、遺構の密度は概ね薄いものでしたが、現在の集落寄りの部分で古い時代に形成された地盤が確認され、3世紀～9世紀頃の溝や穴が見つかりました。これは、これまでに調査されてきた「漆町遺跡」の一部と見られます。

調査区の西縁で 18 世紀頃の河川の岸が、さらに調査区の北東隅で 19 世紀頃の河川の岸が見つかりました。これらは氾濫を繰り返していた梯川が直進化される前の、古い時代の本流の蛇行の痕跡と見られます。

また、調査区南西部で 14 世紀から 16 世紀の鑄物作りの過程で出た廃棄物を捨てた大きな穴(廃滓坑)が見つかりました。廃滓坑は調査区南西部のほぼ全面で約 100 基が見つかっています。その形は円形ないしは楕円形で、深いものは約 50 cm、浅いもので約 10 cm でした。廃滓とともに鑄型と見られる素焼きの製品も出土しました。

『加賀志徴』には「金屋の邑名はいにしへ此地に金屋鑄物師の居たる故に」とあり、隆盛時には鑄物師など 300 戸もの居住があったと記されています。また耕地整理の際に地区の各地から鑄造過程の廃棄物や鉄器類の破片が大量に出土したことも伝えられています。現在の金屋町は 3 戸の住宅があるのみで、それぞれに農業などに従事されていますが、地区の住民の方々の間には現在も鑄物師に関する伝承が伝えられており、今回の発掘調査結果はそれらに符合するものとなりました。

出前
教室

出前考古学教室

出前考古学教室は、埋蔵文化財センターの出土品を活用して、平日、職員が学校や公民館などに遺跡から出土した土器や用具を持ち込んで体験教室や解説会、ミニ展示会などを行うものです。

平成 24～26 年度では、実施件数は年間約 30 件、受講者は年間約 1,650 人となっています。下図に示したように、実施先では、小学校が多数を占め、内容では「縄文人の暮らしにふれる」が人気となっています。地域的には金沢市周辺での実施が多く、能登地方では少ない状況です。

「縄文人の暮らしにふれる」は、縄文時代の出土品解説に、クルミ割りや火おこしなどの体験学習を織り込んだ内容としています。また、「まが玉づくり」を通して、弥生時代の人々の技を学習するものや、身近な地域の発掘調査成果について解説する「ふるさと遺跡塾」なども行っています。

また近年、この教室を一部の市町（津幡町、白山市）と共同開催することが増えてきました。これは、市町の担当者が、地元の出土品を持ち込んで解説を加えるもので、ふるさとの歴史をより身近に感じることができる内容となっています。

「縄文時代の暮らしにふれる」



年表で縄文時代の長さを確認

本物の縄文土器の解説

貫頭衣を着て、縄文時代にタイムスリップ

黒曜石の切れ味を試します

石器でクルミを割ります

もみぎりによる火おこし

出前考古学教室の実施状況
(平成 24～26 年度 実施 86 件の内約 (%))

実施先	学校 (75)			公民館 (12)	その他 (13)
開催地	(6) ← 能美市以南※	川北町 白山市 野々市市 (32)	(金沢市) ※ (14)	内灘町 津幡町 かほく市 (30)	羽咋市～七尾市 (5) → 穴水町以北 (13)
内容	縄文人の暮らしにふれる (65)		地域の遺跡解説 (16)	まが玉づくり (14)	その他 (5)

※金沢市・小松市では市教委でも出前教室を実施

「ふるさと遺跡塾」 身近な遺跡の出土品解説



「まが玉づくり」 弓ぎりによる孔あけ





古代体験学習講座「弥生土器づくり」

古代体験学習講座は、古代の技術や文化を学ぶ1日講座で、本年6月14日(日)の「弥生土器づくり」では、「遺跡から出土した弥生土器を見て、触れて」、「弥生時代の技術と暮らしを体験しよう」とのコンセプトのもと開催しました。参加者は、小学5年生から大人までの22名で、テキストと出土品から弥生文化を学び、卓上に置かれた弥生時代中期中葉～後期前葉の土器と実測図を見ながら、土器の復元製作に取り組みました。

完成した作品は十分に乾燥させ、後日センターの野焼き広場で、土器を薪と稲わらで包み、さらに、わらの外面を粘土で覆った状態で焼き上げました。今回の野焼きでは、わらを厚く重ねた部分が大きな黒斑となりましたが、完成した作品は体験者に引き渡されました。体験者からは、「学校で習った土器を作りたかった」「文様や絵を付けるのは楽しかった」等の意見を頂きました。



文様付け



野焼きの準備作業



作品の焼き上がり

親と子の発掘体験教室

7月25日(日)、小松市の一針C遺跡を会場に、平成27年度第1回目の親と子の発掘体験教室を開催し、11組27名の親子が発掘と土器洗浄を体験しました。

当日の天候は晴。参加者の皆様は気温34度を超える猛暑のなか、安全のためにヘルメットを被り、流れる汗をタオルで拭きながら、弥生時代～平安時代の土器片が出土する溝跡の発掘に取り組みました。

昨年に引き続き一針C遺跡での開催となったことから、参加者の中には、二度目の体験となる方もおり、皆さん、職員の説明とアドバイスを聞きながら、楽しい雰囲気の中で発掘を進め、溝の中から弥生土器や須恵器が出土すると、その形や文様に驚きながら、写真を撮る姿が見られました。

この発掘体験教室は、親子で遺跡の発掘調査に参加し、土器や石器を掘り出す体験などを通して、ふるさと石川の歴史や文化に対する理解を深めてもらう行事として、長年継続しています。本年度は体験者の要望に応え、中学生も対象としました。



募集チラシ



体験の様子

H 27
情報
発信

第 17 回いしかわの発掘展「水の道 陸の道」

7月17日(金)～9月6日(日)まで、旧石器時代から近代に至る約130点の出土品を展示しました。導入部では旧石器時代に何百kmも離れた産地から運んできた黒曜石や、珠洲市の沖合で海底から引き揚げられた珠洲焼などの他、河北潟の水の道を利用した物の運搬の様子などを写した古写真を紹介し、水の道・陸の道の存在を感じてもらいました。

「水の道」コーナーでは、古代の船着き場が見つかった金沢市畝田・寺中遺跡を中心に、津(港)を示す墨書土器や船着き場で使われた梯子などを展示しました。古代の長距離移動に不可欠の糯も、埋文センター職員が各種の米で製作し、手ざわりを体験してもらいました。

「陸の道」コーナーでは、水陸交通の結節点として重要な津幡町加茂遺跡の出土品や、古代北陸道の跡、駅家名を示す津幡町北中条遺跡出土の「深見驛」墨書土器などを展示し、古代の道路政策の一端を紹介しました。交通の要衝には市場が立つことが多く、そこで欠かせなかった棹科を、出土品をもとに製作し、体験してもらいました。

「いまに続く道」コーナーでは、古代以降の道路の様子を紹介するとともに、参勤交代や鉄道のルートを示し、汽車茶瓶など展示する機会の少ない出土品も紹介しました。長い歴史の中で利用されてきた陸の道は、現在でも使われていたり、北陸新幹線の経路と似ている部分があることなど、いまに繋がるものであることがわかります。



見学風景



海揚げりの珠洲焼



糯のコーナー



「陸の道」コーナー

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

国指定遺跡 辰巳用水附土清水塩硝蔵跡

辰巳用水は、江戸時代はじめの寛永年間に、加賀藩が金沢城の水利を改善するために造った用水です。金沢市上辰巳町地内の犀川右岸から水を取り入れ、金沢城二の丸に至っていました。現在でも兼六園までの延長約 11 km が流域の農業用水や兼六園の曲水、池の水源として利用されています。水路は、上流部が主に隧道（トンネル）、中・下流部が開渠となっており、最下流である現在の兼六園から金沢城二の丸までの間は木樋や石管を用いた管路でした。この用水は、江戸時代の土木技術を知る上で貴重な文化財であるとして、平成 22 年 2 月に延長約 8.7km が国の史跡に指定されました。

土清水塩硝蔵跡は江戸時代に加賀藩が設立し

た黒色火薬製造施設の跡です。辰巳用水から引き込んだ水流が黒色火薬の製造に利用されました。塩硝蔵には黒色火薬の原材料である塩硝（硝石）や硫黄、木炭が集められ、水車を使って粉末にされた後、黒色火薬に加工されました。これまでの発掘調査で貯蔵施設や製造施設の跡が見つかり、辰巳用水との深い関連性が明らかになったことから、平成 25 年 3 月に敷地の一部約 3 万 2 千㎡が国の史跡に追加指定されました。

現在、金沢市大桑町（大道割）から錦町にかけての区間は用水脇に遊歩道が整備され、土清水塩硝蔵跡を望みつつ散策することができます。



辰巳用水遊歩道
(大桑町 山側環状崎浦涌波トンネル南側付近)



土清水塩硝蔵跡

所在地：金沢市上辰巳町ほか（辰巳用水）
金沢市大桑町ほか（土清水塩硝蔵跡）
交通：JR 金沢駅から車で 30 分～
問合せ先：金沢市都市政策局
歴史文化部文化財保護課
電話 076-220-2469